

# オンライン学習が築くユダヤの言語のボーダーレスな世界

鴨志田 聡子

## 「イディッシュ語学習活動」とは

4世代の生徒たちがマメ・ロシュンを学んで、それへの愛を分かち合っているのを見るのは報われるし、インスパイアされます<sup>1</sup>。

これはニューヨークの Workmen's Circle という非営利団体で「壁や国境がない<sup>2</sup>」イディッシュ語学習活動を主催するコルヤ・ボロドゥリン<sup>3</sup>（以下、コルヤ）のことばである。「マメ・ロシュン (*mame-loshn*<sup>4</sup>)」とはイディッシュ語のことを意味する。イディッシュ語で *mame* (מאָמ) は「お母さん」、*loshn* (הֶבְרַיִשׁ) は「ことば」で、直訳すると「母語」だが実際には「イディッシュ語」を意味する。

筆者は現在の居住地や年齢が異なる東欧出身のユダヤ人（以下、東欧系ユダヤ人と呼ぶ）たちが集い、展開する「マメ・ロシュン」つまりイディッシュ語の学習活動を参与観察してきた。彼らは普段、各々英語やヘブライ語、ロシア語やフランス語、スペイン語など様々な言語を話して生活している。しかし、ともにイディッシュ語を学習することを通して、先祖の世代から現在までのユダヤ人の記憶を分かち合っている。筆者はこれを客観性が求められる大学や研究機関で実施される学習や研究とは区別し、「自分らしさ」を探究し再構築するための活動として「イディッシュ語学習活動<sup>5</sup>」と呼んでいる。この活動には以下の特徴がある。個人の情熱が原動力になっていること。活動の主体が東欧系ユダヤ人のイディッシュ語話者やその子孫で、個人的な利益や名誉よりもイディッシュ語にかかわること自体を目的にしていること。学習活動が東欧系ユダヤ人の交流の場となり、それを通じて他の言語を話していても充足しきれない「自分らしさ」を満たそうとしていることである。

イディッシュ語学習活動の主体は世俗的なユダヤ人で、彼らの国籍、母語や第一言語は多様である。東欧系ユダヤ人にとってイディッシュ語学習活動は、どのくらい宗教的に厳格か、どこの国家に属しているかといった枠にとらわれずに、東欧を故地とするユダヤ人独自の「記憶」や「自分らしさ」を再構築できる場である。

イディッシュ語学習活動においてはその中心となる個人が非常に重要である。本稿では2014年にイディッシュ語のオンライン講座を創設し、主催しているイディッシュ語講師コルヤに焦点をあててその概要を描き、オンライン講座が解決した従来のイディッシュ語

学習活動の課題を示し、その意義を考察する。

### 主催者のコルヤについて

主催者のコルヤは1961年にロシア極東部にあるユダヤ自治州ビロビジャンで生まれた。ビロビジャンはロシア語、イディッシュ語新聞『ビロビジャンの星<sup>6</sup>』で知られている。コルヤによれば彼の幼少期には、ビロビジャンの道端やラジオではイディッシュ語が聞こえ、祖父母もイディッシュ語を話していた。コルヤ自身は他の多くの人たちと同じようにロシア語を母語として育ち、一度もイディッシュ語を話したことがなく、理解もできなかったという<sup>7</sup>。彼は1988年にイディッシュ語講師に抜擢され教え始めた。イディッシュ語を学びはじめてからわずか3ヶ月のときだった。その後1992年にニューヨークに移住し、コロンビア大学でイディッシュ語を学び修士号を取得した。Workmen's Circle<sup>8</sup>でイディッシュ語を教え始めたのは1993年のことだった<sup>9</sup>。現在ではWorkmen's Circleの他にも、東欧ユダヤ研究所 YIVO<sup>10</sup>、マサチューセッツの Yiddish Book Center、ビロビジャンの学校など複数の組織で大人や子どもにイディッシュ語を教えている<sup>11</sup>。

### イディッシュ語学習活動と筆者による参与観察

筆者はこれまで2003年と2004年（リトアニアのヴィリニウス大学で開催）、2005年（YIVOとニューヨーク大学で開催）、2008年（イスラエルのテルヴィヴ大学で開催）に4～6週間のイディッシュ語の夏期講座を受講した。また2006年から2008年にエルサレム・ヘブライ大学に留学し、イディッシュ語の語学、文学、言語学の授業に継続的に出席した。その間、イディッシュ語話者たちの定期集会、個人宅でのイディッシュ語の読書会などに参加し、彼らの活動を参与観察した。

2003年と2004年に筆者が参与観察したヴィリニウス大学のイディッシュ語夏期講座には、米国やイスラエルなど世界各地から東欧系ユダヤ人の老若男女が参加していた。彼らの多くは別の言語を母語や第一言語としながら、イディッシュ語が聞こえる環境で育ったイディッシュ語話者やその子孫であった。授業中や休み時間に初対面の相手と、家族や先祖の話をしてきた。各々の家族が東欧のどこの出身で、何年にどこに移り住んで、そこでどのくらいイディッシュ語を話していたかが主なテーマであった。彼らの中には筆者に「ユダヤ人ではないのに、なぜイディッシュ語を学ぶのか」と質問する人たちがいた。非ユダヤ人がイディッシュ語を学ぶのは不自然だと考えているようだった。筆者はこの夏期講座の参与観察によって、イディッシュ語学習活動が一般的な語学研修とは違うことに気がついた<sup>12</sup>。

筆者はエルサレム・ヘブライ大学に留学した時期にエルサレムやテルアヴィヴにおけるイディッシュ語学習活動を参与観察した。継続的に彼らの活動を観察することで、彼らがイスラエルの中に東欧系ユダヤ人の共同体を形成し、世界的なネットワークを維持していることが分かってきた。しかもその活動の原動力は、ユダヤ人の国家で現代ヘブライ語を

使っていても満たしきれない「自分らしさ」を、かつて自分たちの家族が東欧で使っていた言語に求めているところにあるようであった<sup>13</sup>。

その現地調査の後、筆者は日本で出産した。再びイディッシュ語から地理的に孤立し、移動ができないために学習活動に参加できなくなった。イディッシュ語を読んだり聞いたりする機会はあるにしても、書いたり話したりする機会はほとんどなくなり、参与観察もできなくなった。しかし2016年度に東京外国語大学で「世界のことばA」という科目に新しくイディッシュ語が加えられ<sup>14</sup>、筆者が担当することになった。そこでそれを機にWorkmen's Circleのイディッシュ語オンライン講座を受講しはじめた（図1参照）。



図1 オンライン講座「世界のイディッシュ語<sup>15</sup>」授業風景のスクリーンショット（Borodulin<sup>16</sup>を筆者編集）。  
 (図の説明) オンライン会議システムを使って集う講師（左端）、その日のゲスト（中心）と受講生たち。

筆者は毎週2回継続的にインターネットで授業を受けた。もともと自分自身の語学力の向上と、イディッシュ語教育の情報を得ることを目的に参加していた。とはいえ結果的にイディッシュ語学習活動の継続的な観察や、日本におけるイディッシュ語学習活動の経過報告もできた。

### イディッシュ語オンライン講座とその背景

オンライン講座によって学習活動に参加する機会が得られるようになったのは筆者だけではない。

主催者によれば、米国各地、ロシア、東欧、南米などに住む人たちの多くは、夏期講座やサマーキャンプなどを除いて誰かとイディッシュ語を学ぶ機会がほとんどなかった。また高齢であったり、身体が不自由であったり、体調がすぐれなかったりするために教室に通えなかった人たちもいた。孤立していたのは受講者だけではなかった。イディッシュ語講師はニューヨークを中心に、米国各地やエルサレム、テルアヴィヴ、ブエノス・アイレ

ス、パリなどに散在している。対面式<sup>17</sup>の授業のためには、どちらかまたは両方が移動する必要がある。しかし、オンライン講座ではこれらの問題がなく、これまで「孤立」していた潜在的な講師と受講者がオンライン講座をきっかけに一緒に学ぶことができるようになった。コルヤによれば様々な講師と学習者が継続的にイディッシュ語を話すことで、イディッシュ語の話題や表現が多様化し豊かになっているという<sup>18</sup>。「世界のイディッシュ語」授業では、世界中から全60人の「ゲスト」が授業に招かれた<sup>19</sup>。ゲストは自分の研究、活動、考え方について説明し、受講者たちの質問に答えた。ゲストの交流に限らず受講者同士の交流も見られるインタラクティブな授業は、イディッシュ語やそれにかかわる人々の活動に新しい展開をもたらす可能性がある。

### イディッシュ語話者の拡散と減少の背景

イディッシュ語話者は現在では世界で50万人から200万人とされている<sup>20</sup>。話者の居住地が拡散しているマイノリティ言語にありがちだが、正確な話者数はわからない。話者自身が自分を話者であると自覚していない場合があること、孤立している話者を把握できないこと、他から隔絶された超正統派ユダヤ教徒にどのくらいの話者が存在するかが明確でないからである。

イディッシュ語の話者はホロコーストによって激減した。虐殺を逃れたユダヤ人は、移住先の言語の習得を優先させた。離散やホロコーストを象徴し、貧しい、惨めといったネガティブなイメージをもったイディッシュ語は、ユダヤ人自身から嫌悪され次世代に継承されなかった。とくにシオニズムやその末に建国されたイスラエル国においては、国家の言語としての現代ヘブライ語の普及に際して、多くの人々の日常の言語であったイディッシュ語は邪魔だと考えられたのだ<sup>21</sup>。

イスラエルにおいてイディッシュ語話者のメディアで活躍した人のひとりに、モルデハイ・ツァーニンという人物がいた。その息子ゼエヴ・ツァーニンはイディッシュ語を聞けば理解できるが、ほとんど話せないといいながら筆者に次のように証言した。

イスラエル独立直後は、公共政策において国家はイディッシュ語に、むしろその反対の態度をとった。人々がヘブライ語だけを話すようにしたかったんだ。新しい国家のヘブライ語、ヘブライ語！新しいイスラエル人、新しい種類の人間「サブラ（イスラエル人生まれのユダヤ人）」のようなね。ともかく…ヘブライ語とは対象的に、イディッシュ語に対してはとても風当たりが強かったんだ。

私が幼かった頃、両親は…イディッシュ語が私の人生に邪魔になるだろうと考えたから。つまり私が…ヘブライ語を上手に話せなくなるんじゃないかとか…いろんなことを考えたんだろう。だから、私とはヘブライ語だけで話したんだ…少し残念だよ。

(Ze'ev Tsanin, 2008.08.24 鴨志田による聞き取り調査<sup>22</sup>)

「ユダヤ人の国家」の誕生により、ユダヤ人の言語が廃れていったのは皮肉ではあるが、これも理想のイスラエル国をつくるために払わざるを得なかった犠牲なのだろうか<sup>23</sup>。こうして日常の言語としてのイディッシュ語の機能は、超正統派ユダヤ教徒の一部を除いては次世代にほとんど継承されなかった。

しかし実は一部の世俗的ユダヤ人の間でイディッシュ語の文化的な保護がなされ現代まで継承されていた。現在イディッシュ語は米国の主要大学を中心に、世界各地の大学やユダヤ人の組織で教えられている。さらに大学の夏期講座や市民講座でも教えられている<sup>24</sup>。また個人宅に集まってイディッシュ語文学を読み、イディッシュ語で議論をする読書会のような活動もある。こういった活動は、イディッシュ語運用能力と読解力をもった有志が一定数集まった場合にのみ可能であり、それゆえそれほど行われていない。例えば一定数のイディッシュ語話者が見込まれ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校にイディッシュ語の授業が存在するロサンゼルスでさえ、そういった活動はまれなようである<sup>25</sup>。2019年2月にロサンゼルスのあるシナゴグの集会場において、コルヤがビロビジャンについて講演した。高齢者を中心に60人ほどの聴衆が集まり、その中にはイディッシュ語話者やその子孫も多いようだったが、講演も活発だった質疑応答もほとんど英語だった<sup>26</sup>。たとえイディッシュ語が聞こえる環境で育った人でも、日常生活でそれを使う機会がほとんどなかったりすると、自分でそれを話すのは難しいようだ。

### 「集い」への潜在的な需要の発掘

オンライン講座によって、イディッシュ語話者が日常的に集うことができるようになった。イディッシュ語講師らによる宣伝、受講者による口コミ、メディアなどによりオンライン講座の知名度は上がり、規模が拡大している。コルヤによれば、学期あたりの受講者数とクラス数は、オンライン講座が始まった2014年には約40人3講座だったが、2017年秋に158人13講座、2019年春までに190人22講座に増加した。年齢制限はなく、2019年現在14歳から84歳までと幅広い年齢層を受け入れている<sup>27</sup>。

Workmen's Circleではオンライン講座が始まる以前の1990年から対面式のイディッシュ語講座が開かれている。しかし老化や病気などで教室まで通えなかったり、通えなくなったりする人々がいた。Workmen's Circleはサマーキャンプ「イディッシュランドへの旅<sup>28</sup>」を2006年から現在まで主催している。参加者は8月に1週間ニューヨーク州のキャンプ地でイディッシュ語を使ってレクリエーションをする。キャンプの間はイディッシュ語を話すことができるが、その後はほとんど話す機会がもてない場合が多い。サマーキャンプや対面式の講座をきっかけにオンライン講座を受講しはじめる人もいるようだ。逆に、オンライン講座をきっかけにサマーキャンプに参加する人々もいるようだ<sup>29</sup>。

### オンライン講座の概要

筆者は2016年春から2019年現在までコルヤが担当するイディッシュ語の会話の授業

と、ブエノス・アイレス在住の講師アブロム<sup>30</sup>が担当する小説読解の授業を受講している。

オンライン講座の受講者は退職者、学生、研究者、教師、自営業者など様々である。講師は研究者や教師、作家、歌手、俳優などである。イディッシュ語話者のその子孫が多数派である。それ以外に研究や仕事のため、または趣味で、イディッシュ語を勉強している非ユダヤ人やユダヤ教への改宗者もいる。

講座のレベルは初級、中級、上級の3つに分かれ、それぞれテーマごとにクラスが分かれている。授業は初級からほぼすべてイディッシュ語で行われる<sup>31</sup>。内容はおおまかに初級で語学の基礎、中級で会話や小説読解、上級で小説読解やイディッシュ語言語学や東欧ユダヤの歴史についての講義である。イディッシュ語で議論することも目標とされている。議論といっても、必ずしも学術的で厳密なものが求められているわけではない<sup>32</sup>。むしろ東欧出身のユダヤ人の生活について自分の知識や体験を共有したり、イディッシュ語文学の内容を普遍的なことに置き換えて考えたりして、自分の意見を言うことが求められている。こうして会話を発展させながら、イディッシュ語を使う。

オンライン講座の受講者の多くはアメリカに住んでおり、講座の概要の紹介や募集は主に英語で<sup>33</sup>、受講料は米ドルで支払う。1コマ90分の授業の開始時刻はニューヨークの現地時間で13時と18時半で<sup>34</sup>、米国に住んでいる人の都合に合っている。一方で授業で英語を使うことはまれで、ほとんどすべてイディッシュ語である。少なくとも筆者が受講しているクラスについては、宿題を提示するメールの本文も宿題もほぼイディッシュ語である<sup>35</sup>。

課題の量は少なくないが必ずしも義務ではなく、出席もとらず試験もない。しかも講義の途中でも気軽に休憩、「退席」できる。乳幼児を脇に抱えながら参加しても、例えばインフルエンザに感染していたとしても、他の参加者に迷惑をかける心配はない<sup>36</sup>。講師や他の受講者とのコミュニケーションもマイクやチャットの機能を使って自分のペースでできる。授業を欠席した場合や復習したい場合は、授業の録画で自主的に補講できる。対面式と比較して、受講スタイルにおける自由度が高いと言えるだろう。

イディッシュ語学習活動では、講師と受講者の間に教える者と教えられる者という上下関係があまりない傾向がある。講師を進行役として、皆で主体的に「自分たち」を追究している様子の特徴である。言語学習を主軸にイディッシュ語話者のコミュニティを形成し、日常的にイディッシュ語を使う場を創出し、維持することが大切にされているようだ。

内容を言語学習にすることで集会の目標が明白となり、イディッシュ語を使うという継続的な共同作業にさらに集中することができるゆえ、イディッシュ語も上達させることができる。

## オンライン講座でつながったイディッシュ語学習活動と日本

イディッシュ語から地理的に完全に孤立している日本にしながら、教育経験豊富なイディッシュ語話者の指導が受けられるオンライン講座は、筆者にとって非常に都合が良

かった。定期的にイディッシュ語を使うことで言語運用能力を向上させ、新しい知識にふれることができたからである。さらに自分が行っているイディッシュ語の授業の進め方や、そこで扱うテキストについて気軽に相談できる相手に定期的に会うことができた。

例えばこんなエピソードがある。2017年春学期に東京大学大学院人文社会系研究科現代文芸論研究室でイディッシュ語の授業が開講された際のことである。筆者は初学者の頃に2003年か2004年にヴィリニユスのイディッシュ語夏期講座で読んだテキストを、東京大学の授業でも使えたらと考えた。しかし、当時配布された印刷物は手元に残っておらず、そのテキストのタイトルも作者も不明だった。ある日オンライン講座で講師や他の受講者にそのテキストの特徴について話し、どこかで手に入らないかと相談した。するとその場で受講者の一人であるブラジルのイディッシュ語教師が、それは『初学者<sup>37</sup>』というテキストだと教えてくれた。さらに講師や他の受講者が、あれは良いテキストだ、自分も読んだことがあるなどとコメントした。さらにはPDF版がYiddish Book Centerのデジタルライブラリー<sup>38</sup>で入手可能だと教えてくれた。同様に東京外国語大学の授業で使用した初学者向けのオンライン教材YiddishPOP<sup>39</sup>の存在を最初に教えてくれたのも彼らであった。このように気軽に相談できる場があることで一瞬で解決できる問題もあった。

筆者は、2018年3月にニューヨークのWorkmen's Circleを訪問し、初めてコルヤと対面して話をした。その時は筆者にヘブライ文字を楽しく効率的に覚えるための子ども向けの教材「イディッシュ・ビンゴ<sup>40</sup>」の使い方を実演し、日本で使ってみようにと手渡した。実際に日本の大学の授業や市民講座で使ってみると、初学者のモチベーション維持のためにも、クラスの雰囲気作りのためにも、遊びながら文字を覚えることはとても効果的であることが改めてわかった。そこで筆者はそれを真似て「イディッシュ・カルタ」や「イディッシュ・スゴロク」を作り、授業で使ってみたところ非常に有効であった。

日本におけるこれらのイディッシュ語の授業は、ニューヨークを中心に海外のイディッシュ語学習活動の強い影響を受けている。もしも日本におけるイディッシュ語学習活動が世界の他の地域におけるそれらから孤立していたら、海外の新しい情報を取り入れながら授業をすることは難しかっただろう。言語学や文化人類学の分野では、調査協力者へのフィードバックが課題である。そのため筆者はオンライン講座やイディッシュ語新聞への寄稿、SNSでの発信やシンポジウムなどの発表などで日本での様子を現状報告することになっている。

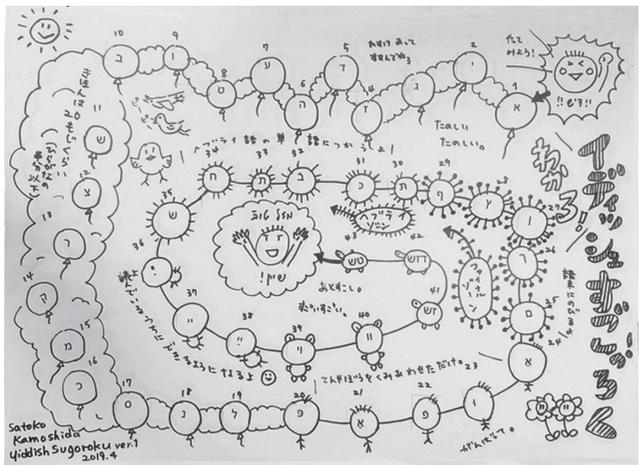


図2 イディッシュ・スゴロク

イディッシュ語話者が言語的に孤立しているのは、米国各地、ロシア、ウクライナ、南米などに住む人々も程度の差こそあれ同様であろう。コルヤは、オンライン講座によって彼らに言語的に「それほど孤立していない<sup>41</sup>」と感じさせることができると考えている。かつて、ビロビジャンで初学者であったにもかかわらず、講師になってしまった経験も、彼が「孤立」に言及する理由のひとつかもしれない。

一定以上の教育の経験や技術をもつ講師が少なく講師と学習者が世界中に散在している言語においては、次の世代の講師を育成するオンライン講座はとくに有効である。

## 結び

オンライン講座は、地理的に離れているために埋もれていた潜在的な講師や学習者にイディッシュ語学習の場を提供した。拠点に限られていたイディッシュ語学習活動だが、現在ではインターネットがつながる場所であればどこでも可能になった。中心となる人物の情熱は大きな原動力となり、より多くの人々を巻き込み、潜在的な需要を掘り起こし続け、イディッシュ語学習活動の規模が拡大している。

ある言語の話者や子孫の間では常識でも、それ以外の人には全く理解できないことがある。2003年に教科書『カレッジ・イディッシュ<sup>42</sup>』で筆者がひとりでイディッシュ語を学び始めたとき、単語の意味を調べても、短い文章が何を言わんとしているのか全くわからなかった。例えば、本稿冒頭に引用した「マメ・ロシュン」がほとんどの場合イディッシュ語のことを意味するのは辞書を引けば書いてあるが、筆者がその使い方を理解したのは、イディッシュ語話者に会って、話しことばや書きことばでいくつもの用例に触れ、何度も間違えながら使ってからだった。イディッシュ語の話者や子孫においても、普段からイディッシュ語にふれる機会がなければ、似たようなことが起こり得るのではないだろうか。彼らが「自分らしさ」を再構築し現在をより充実させるためにも、イディッシュ語を次世代に継承するためにも、このオンライン講座は大きな役割を果たしているといえる。

注

1. Kolya Borodulin, "Online Yiddish Classes at the Workmen's Circle" [<https://ingeveb.org/pedagogy/online-yiddish-classes-at-the-workmens-circle>] (2019年6月19日閲覧).
2. Kolya Borodulin, in Sheva Zucker et al., eds., *Afn Shvel*, 380-381summer-fall (New York: League for Yiddish 2018), p. 37.
3. Kolya Borodulin はイディッシュ語名で、イディッシュ語学習活動においては、主にこの名前で知られている。本名は Nikolai Borodulin。
4. 本稿では以下、イディッシュ語は YIVO のラテン文字表記を用いて表記。
5. 鴨志田聡子『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』三元社、2014年。
6. *Birobidzhener Shtern* (Биробиджанер штерн) [<http://www.gazetaeao.ru/birobidzhaner-shtern>] (2019年7月1日閲覧).
7. 2019年7月 Kolya Borodulin 私信
8. *Der Arbeter-ring* がイディッシュ語名。本稿では以下、英語名 Workmen's Circle を用いる。
9. Sheva Zucker, "Kolya Borodulin." in Sheva Zucker et al., eds., *Afn Shvel*, 380-381summer-fall (New York: League for Yiddish 2018), p. 75.
10. YIVO は *Yidisher visnshaftlekher institute* の略。英語名は YIVO Institute for Jewish Research。この研究所は東欧系ユダヤ人を研究対象としているので本稿では「東欧ユダヤ研究所」と訳した。
11. Workmen's Circle Website, "Meet our instructors" [<https://circle.org/what-we-do/yiddish-language/yiddish-language-instructors>] (2019年7月1日閲覧).
12. 鴨志田聡子『言語的故地巡礼：東欧系ユダヤ人のリトアニアにおけるイディッシュ語学習の場合』（修士論文）、中京大学、2005年。鴨志田聡子「言語的故地巡礼：東欧系ユダヤ人とイディッシュ語」、社会言語学刊行会『社会言語学』(5)、pp. 25-33、2005年。
13. 鴨志田『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』2014年参照。必ずしも、すべての東欧系ユダヤ人がイディッシュ語を学べばアイデンティティが再構築され、満たされるわけではないようであるし、とくにそれを希望していない人たちもいる。筆者が観察した活動はごく一部の東欧系ユダヤ人によるものにすぎないが、重要であることは記しておく。
14. 東京外国語大学においては、毎年 20 人から 30 人ほどの学生が受講している。授業は 2019 年現在まで続いている。
15. *Mit Yidish iber der velt* (Yiddish Around the World)
16. Kolya Borodulin, "Online Yiddish Classes at the Workmen's Circle" (2019年6月19日閲覧).
17. オンライン講座も対面しているのではあるが、物理的に集合して学ぶ講座を対面式と呼ぶことにする。
18. Kolya Borodulin, "*Yidish-klasn on vent un grenetesn*," pp.37-39, 75.
19. *Ibid.*, p.39.
20. Lily Kahn, "Yiddish," in Lily Kahn and Aaron D. Rubin eds., *Handbook of Jewish Languages* (Leiden: Brill, 2016), p. 643.
21. 鴨志田『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』2014年、p.94-98.
22. *Ibid.*, p.95.
23. 東欧系ユダヤ人のイディッシュ語に限らない。世界各地からのユダヤ人移民は、イスラエル社会の一員として言語的にも現代ヘブライ語に同化した。こうして移民たちの移住前の言語はイスラエルで話されなくなっていった。
24. イディッシュ語はコロンビア大学、ハーバード大学、ジョンズ・ホプキンス大学、テキサス大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校などの米国の大学、ドイツのトリア大学、デュッセルドルフ大学、エルサレム・ヘブライ大学などをはじめとした世界各地の大学で教育されてきた。夏期講座はニューヨークの YIVO (イヴォ、

YIVO Institute for Jewish Research)、フランスの Medem (メデム、Maison de la culture yiddish)、リトアニア大学の Vilnius Yiddish Institute、テルアヴィヴ大学の The Naomi Prawer Kadar International Yiddish Summer Program などで行われてきた。市民講座も Workmen's Circle、Shalom Aleichem House (テルアヴィヴ) などで行われている。

25. 2019年2月 筆者による現地での聞き取り調査。車での移動が余儀なくされることや、話者の高齢化などにより集まりにくいことも理由として考えられる。
26. 2019年2月 筆者による現地調査。このとき講演者だったコルヤは、普段からイディッシュ語を使っており、それで話すことには全く問題ない。
27. 2019年7月 Kolya Borodulin 私信
28. *Rayze in Yiddishland* (Trip to Yiddishland). Workmen's Circle, "Trip to Yiddishland" [<https://circle.org/what-we-do/yiddish-language/yiddishland>] (2019年7月1日閲覧). *Yugntruf* (call to youth) というニューヨークにあるイディッシュ語とその文化を促進する別の団体によるサマーキャンプ「イディッシュ週間」*Yidish Vokh* (Yiddish Week) も存在する。「イディッシュ週間」はイディッシュ語だけで話すことを原則としているが、「イディッシュランドへの旅」は多少は英語で話すことも許容している。これらの企画は内容だけではなく、日程も重複しないように調整されている。
29. 2019年7月 Kolya Borodulin 私信
30. 1994年からブエノス・アイレスのユダヤ研究所 (IWO) の事務局長をしている。ニューヨーク、ヴィリニウス、ワルシャワなどの夏期講座で小説読解の授業を担当してきた。イディッシュ語文学と歴史の分野での著名人。
31. 例外的にイディッシュ語以外の言語が使われることもある。インターネットの調子が悪く、接続し直すように指示を出すときの言語は、まずイディッシュ語、それで伝わらないと英語が使われる。また難しい単語は講師や受講者がチャットで英訳をシェアすることがある。
32. 大学や YIVO など学術機関の研究活動とのすみ分けが行われている。
33. イディッシュ語のメーリングリストや申込みに際しての個人的な連絡には、イディッシュ語が使われる。ただし受講者やときには講師でさえ、母語や第一言語は英語、ロシア語やスペイン語など他の言語である場合がほとんどである。各々がどの言語で個人的な連絡をしているのかは調査していないのでわからない。
34. この時間は、エルサレム、モスクワ、キエフ、ピロビジャンでは夜間や深夜または早朝である。
35. 英語で書かれたインタビュー記事に目を通す宿題など一部例外もある。
36. 一般的に育児や療養の際に、これまでかかわっていた活動に容易に参加できず、孤独と不安を抱えることがある。オンライン講座で人に会い知的な共同作業をすることはこういったときに支えになると考えられる。
37. David Bridger, *Der onheyber* (New York: Matones 1947).
38. Yiddish Book Center, *Steven Spielberg Digital Yiddish Library* [<https://www.yiddishbookcenter.org/collections/yiddish-books/spb-nybc200638/bridger-david-der-onheyber>] (2019年7月1日閲覧).
39. *YiddishPOP - An Animated Educational Site for Yiddish Language* [<http://www.yiddishpop.com>] (2019年7月1日閲覧).
40. Nikolai Borodulin and Robert M. Lassen, *Play and Learn Yiddish! Bingo and Shlakhtshif and More Enjoy!* (New York: Workmen's Circle 1998)
41. Kolya Borodulin, "*Yidish-klasn on vent un grenetesn.*" p.38.
42. Uriel Weinreich; Roman Jakobson; Jeffrey Shandler, *College Yiddish: an introduction to the Yiddish language and to Jewish life and culture*. 6th revised (New York: YIVO Institute for Jewish Research 1999)

# Creating a Borderless World of a Jewish Language through an Online Language Program

**Satoko KAMOSHIDA**

---

For a minority language, such as Yiddish, it is important to create interactive learning spaces and to connect teachers and learners of that language scattered all over the world. Since 2014, the online Yiddish program of the Workmen's Circle in New York has discovered participants who had been geographically isolated, providing Yiddish classes and connecting them. The author has taken part in two of them, been gained ideas for her Yiddish classes at Tokyo University of Foreign Studies and the University of Tokyo. Based on Borodulin (2017; 2018) and the author's participant observation since 2016, this paper describes the Workmen's Circle online program and its effects on the Yiddish class in Japan. This borderless learning activity would strengthen and broaden the speakers' community and train teachers all over the world.